大正　年　月　日

サンタバーバラより ニユオルレアンスへ

こうも せい子

前夜すつかり荷造りをして置たので、起きればすぐ出立するばかりである。~~それ有~~

~~[illegible]~~

八時になつたので、下の電話をかり、町からタキシーを呼んでもらふ。我々は手荷物を持つて、そろ〳〵階下へ行くと、そこにはもうおばあさんもその弟のミスタージヨンも待ちかまへて居る。さうして我々の長旅の前途を祝してくれ、かたい握手をかわす。おばあさんはいきなり私をかゝへこんで、襟元に幾度もキッスをする。かねて、外國の習慣とは聞いては居たもの〻、さすがにそうばかりとも思へず、われ知らずほろりとする。

旅とは云ひながら二ヶ月あまり住み馴れた家の名残惜しく

最早扉外（そと）には車も来て居るので、心せかれて、重い足を家の前のサイドウオークへ運ぶ。車へはひつてから、もう一度、いよ〳〵これでこの家も最後の見終めと、のび上がるやうにふりかへつて見ると、今我々の出て来た、フロントポーチの階段に、